

岩松浅夫先生のご退職に際して

菅野 博史

1 岩松浅夫先生のご退職に際して

一九九四年四月より創価大学文学部人文学科に赴任され、東洋思想史、サンスクリット語を担当されてきた岩松浅夫先生が本年三月ご退職を迎えられます。一九八八年に人文学科が創設されたときには、三年次の配当科目としてサンスクリット語が予定されていました。当時、創価大学教授であった岩本裕先生が担当される予定でしたが、『日本佛教語辞典』（平凡社、一九八八年）の校正の激務がたたったのか急逝されてしまいました。そこで、私は友人の羽矢辰夫先生（現在、青森公立大学教授）にお願いして、非常勤講師として一九九〇年から二年間、サンスクリット語を担当していただきました。羽矢先生が青森公立大学に赴任された後、岩松浅夫先生に一九九二年から二年間、非常勤講師としてサンスクリット語を担当していただきました。ちょうど、一九九四年から人文学科にインド仏教の専任教員を迎える機会があり、上に述べたようなご縁があっ

て、岩松先生が助教授として赴任されたのでした。

岩松先生と私は、東京大学文学部の印度哲学印度文学専修課程の同窓生ですが、年齢も学年も違いますので、学生時代はほとんど面識がございませんでした。しかし、二人とも大学院を修了してから、中村元先生が創立された（財団法人）東方研究会の専任研究員となりましたので、研究会の行事のときなどにしばしばお会いするようになりました。その頃は、同じ大学で二十年の長きにわたって同僚となることなどは想像もつきませんでした。

ここで、岩松先生の研究者としての履歴を簡単にご紹介させていただきますと、岩松先生は、東京大学文学部を卒業後、大学院に進学され、一九七九年には東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専門課程を満期退学されました。その後、財団法人東方研究会専任研究員を経て、前述したとおり、一九九四年四月より本学文学部助教授として赴任され、その後、一九九九年四月に教授に昇任され、今日に至っております。

岩松先生は、大学院に在学中より一貫して、サンスクリット語、パーリ語、チベット語を用いたインド仏教の研究を志ざしてこられました。パーリ語仏典の研究、「阿弥陀」の原語の問題について新説を発表されたこと、韻律の分析に基づいて、『維摩經』『月灯三昧經』『法華經』『十地經』などのサンスクリット語經典の偏頗に対してなされたご研究は、仏教学界において高く評価されています。岩松先生のご学風は、厳密な文献学的研究をその特徴としておられますが、パーリ語經典『マハーパリニツパーナ・スッタタタ』、いわゆる小乗の『涅槃經』の現代語訳のご出版もあり、一般の読者にも歓迎されました。

私が軽い気持ちで岩松先生に「法華経」方便品のある偈頌について質問したところ、岩松先生はなんと「梵文『法華経』「方便品」第29偈について——和訳と解釈をめぐって——」という一篇の論文をもって解答を与えてくださいました。岩松先生の学問魂に触れた思いで、大変感銘を受けました。学者たるもの、このようにありたいと思いました。

岩松先生は本学へ着任されて以来、教育に関してもたいへんなご尽力をされてこられました。とくに仏教思想に関する正確な理解は学生の教育に大きな貢献を果たされましたし、サンスクリット語の教育においても地道な教育を続けてこられました。その謹厳実直なご人格に接して、私たち同僚、多くの学生・大学院生が得たものはきわめて大きなものがあつたと思います。

岩松先生は、七十歳を迎えられる今日まで、決して多作ではありませんが、堅実に研究論文を発表し続けてこられました。その集大成として、個人の論文集を刊行される計画もあると伺っており、楽しみにしております。

幸い、岩松先生はご健康に恵まれて古稀を迎え、ご退職されます。今後は、教育の義務、校務などから解放され、大好きな学問研究に心置きなく取り組むことができると思います。今後とも仏教学界、後進を導いてください。長い間、ありがとうございました。